

■□ 現地報告V

大学生協での震災復興支援活動

～福島大学生協と全国大学生協連の事例から～

田中 康治 (宮城教育大学生協 専務理事)



宮城教育大学生協の専務理事をしております田中と申します。震災当時、福島大学生協で専務理事をしておりました。その後、大学生協連の東北ブロックで、昨年まで仕事をしておりました。現在、宮城教育大学生協におります。私からは、大学生協で行ってきた復興関連の活動について、すべてはなかなか紹介できないのですけれども、特に、学生の活動への関わりという点を強調しながらお話しをしたいと思います。

地震発生時の福島大学のことをお話ししたいと思います。大学に対してどういう協力を行ってきたのかが、大きなポイントになります。ちょうど後期入試の前日でしたが、その日は新入生サポートセンターを運営していました。新入生になる方たちが次々いらしていましたが、避難後みんなお帰りいただき、学内に寮もありましたので、購買店を22時まで臨時営業にしました。学内には、当時避難所が緊急に設けられましたので、そちらで食料の提供も行いました。翌日の夜まで臨時営業を行いました。大学からの要請に応じて学内にある寮への飲料提供を行っております。

原発事故がどうやら起きたという報道が入ってきて、屋内退避指示が学生に対して出され、大学が学生へそのことを周知したいとのことでしたので、生協が学生アパートの大部分を把握しているということで、生協職員が分担をして大学が作った屋内退避の案内紙を配布しました。また、炊



スライド1

き出しでおにぎりの配布ですとか(スライド1)、あと安否状況の確認ということで、今のように大学で安否状況を簡単に集められるような仕組みもできていなかったもので、ツイッターで情報を拡散し、生協でも協力して1,000人を超える学生の安否情報を集めて、大学へお渡ししました。また、大学が福島県浜通り地域からの避難者を受け入れる施設にもなったということで、生協食堂を避難所の食事施設にする対応に協力しました。ポイントとしては、冒頭申し上げたように、大学生協は大学との協力関係の構築、普段からの関係構築を大変重視していました。

エピソードとして紹介をしておきますと、遅れて入学をしてくる状況でしたが、新入生のサポートセンターを再開しました。御用聞き電話を行いました。どのようなことで困っているのかを聞いて、さらにそういったなかで入学辞退をするという情

報をいただくこともあって、すぐに大学と共有も行いました。また、被災されているのではないかとされる住所の方には、店長自らが電話をして状況を尋ねる。まさに、家族が行方不明になってしまって、とても入学の準備どころではない、大変お困りになっている声などを当時伺ったことを覚えています。



スライド2

学生の関わりについて触れたいと思います。学生たちは被災者でありながら、大学の前期講義が始まるのが遅れたということで、ボランティア活動に積極的に参加する姿が見られました。これは、大学生協連で全国から学生を募集して行なった七ヶ浜や多賀城でのボランティアの様子です。被災者でありながら、動いてきたということです（スライド2）。続いてこちらは、私が当時、福島大にいたときに震災当時一緒に活動していた学生たちです。こういった学生たちが、来年、福島に入学者が来るのだろうかという話をしていましたが、なんとか無事オープンキャンパスを行なって、高校生たちを迎え、次の年、確かに福島に来る人の自宅生の割合が増えた年ではありましたが、学生たちが本当に頑張っている活動を行っていたことが思い出されます。オープンキャンパスの写真のなかで、当時



スライド3

の学長先生が生協で出しているテントのところで結構長い時間いてくれて、学生たちが高校生に応援メッセージを書くのですが、一緒になって学長先生が高校生たちと話をし、大学生と一緒に盛り上がっていたのが記憶に残っています（スライド3）。

こういった学生たちが、震災後さらに1年、2年と経過するなかで、どのような活動を行なっていったかを次に紹介します。

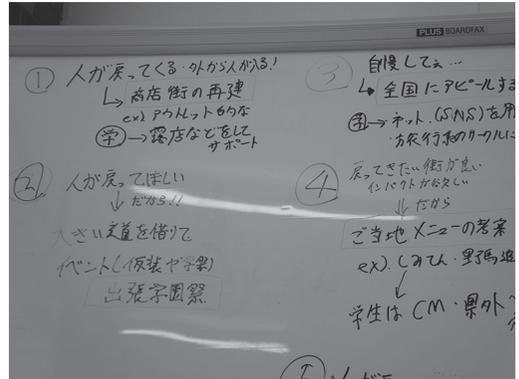
避難区域が少しずつ解除されて、当初立ち入りが出来なかった原発被災地に入っていける状況が進むなかで、実際に見に行くというバスツアーを行っております。これは流された車やがれき、崩れた家などが残っているところを学生たちが見学します（スライド4）。まだ人が住み始めている状況のなか、街を歩きます。写真だとわか



スライド4



スライド5



スライド7



スライド6



スライド8

らないかもしれませんが、動物の骨が散乱している状況で、震災から数年たっても、こういう状況のままなんだということを、実際に目で見てもらいました（スライド5）。これは浪江から原発が見える方角を見てもらっている様子です（スライド6）。こういった取り組みのなかで、ただ大変だという状況を見るだけではなくて、現地の人たちが、どういうことを求めているのか、ワークショップを行いながら訪問活動を行なったところが大きな特徴です（スライド7）。こういった活動を通じて、普段の生活を取り戻したいという声を伺うなかで、実際、南相馬市原町地区に出かけて、子どもたちとのふれあい企画も行なっており、震災翌年には60名ほどの学生が参加しま

した（スライド8）。

先ほど、福島大学の当時の学長先生が学生の取り組みのところに注目してくれたという話をしましたが、その後学長先生は大学生協連が行う七ヶ浜のボランティア活動の現場にも来て科学マジックを披露してください、やっぱり大学との関係づくりというのは大事ななと思いました（スライド9）。

大学生協の東北ブロックや大学生協連で行なってきた活動についても、簡単に紹介しておきたいと思います。東北ブロックでは、被災地訪問、ふくしまスタディツアーを毎年行なってきております。1日目は福島大学での講義を聴講する、2日目は福島県浜通りを現地見学します。3日目は、これらを持ち帰り課題化するという企画で

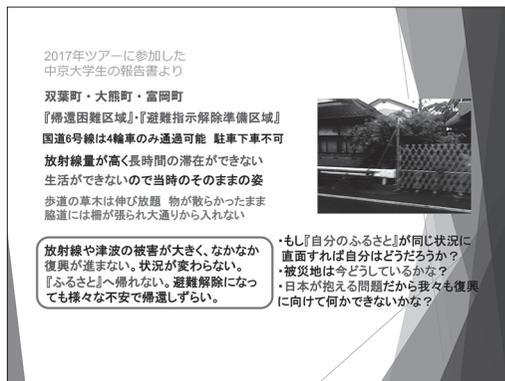


スライド9

す。震災翌年から、全国から学生が集まってバス1台分の人数で行うようになりました。2018年のツアーからは、放射線の基礎知識と農産物への影響に関する講義を聞いたときの学生の感想文、さらには歴史文化資源を守り伝えるといった講義を聞いたときの学生の感想文を紹介しています。また、先ほど浜通り医療生協の工藤さんから夜ノ森地区の紹介がありましたけれども、富岡町夜ノ森にて、実際、街が柵1本で隔てられている現状を見てもらったり、浪江町の街のなかを約1キロちょっと歩いてもらったり、実際の現場を体感してもらうことを行いました（スライド10）。これは最後に、みんなで討論しているところです。ツアーに参加した中京大学生の報告の抜粋



スライド10



スライド11

ですが、本当に毎年、学生たちが事前の学習会と事後の報告会に、熱心に取り組んでくれています（スライド11）。現在の大学生協東北ブロックの活動ですけれども、防災委員会を立ち上げ、活動に取り組んでおりまして、防災交流会、防災マネジメントツアー、全国からご協力いただきました募金を高校に贈呈する、そのような活動を現在は行なっております。

最後に、現在、大学生協は、新型コロナで学生の数が学内から減って、大きな影響を経営的にも組織的にも受けております。私が仕事をしている宮城教育大学生協も、従業員が1年間の間に半分まで減りました。震災から10年たって、これからは、震災を巡っての課題とコロナからの最新の課題、両面で取り組んでいくことになると思います。学生のことが大きなポイントだと言いましたが、たとえば私がいる宮城教育大学では、100名近い生協学生委員が現在活動をしてれています。そういった学生の力は、本当に頼もしい限りです。学生組合員と一緒に、今後も社会的課題、そして大学生協の再生課題に取り組んでまいりたいと思います。時間オーバーして申しわけございません。以上で報告を終わります。